

H16-3-1



普天満宮

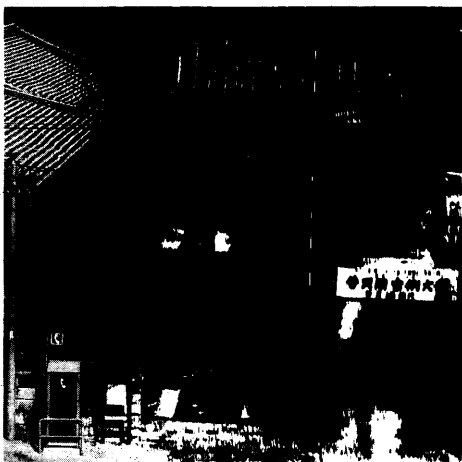
略記

〒901-2202

沖縄県宜野湾市普天間一丁目二十七番十号

電話 (〇九八) 八九二―三三四四

FAX (〇九八) 八九二―〇九九四



普天満宮 略記

鎮座地

沖縄県宜野湾市普天間一丁目二七番一〇号

御祭神

一、熊野権現

二、琉球古神道神

伊弉冉尊
いさなのみこと

日の神

速玉男命
はやたまをのみこと

竜宮神（ニライカナイ神）

事解男命
ことさかをのみこと

普天満女神（グジー神）

天照大御神
あまてらすおほみかみ

他 天神・地神

家都御子神
けつみこのかみ

御由緒

当宮は別称普天満権現ともいい、琉球八社の一つである。創建については往昔、普天間の洞窟に琉球古神道神を祀ったことに始まり、尚金福王から尚泰久王の頃（一四五〇～一六〇年）熊野権現を合祀したと伝えられている。現存する古い記録には「普天満権現」碑（一五九〇年）がある。琉球神道記（一六〇五年）琉球国由来記（一七一三年）琉球国旧記（一七三一年）にも当宮関係が記載されている。前記の琉球神道記には「當國大社七處アリ六處ハ倭ノ熊野権現ナリ一處ハ八幡大菩薩也」又「普天間権現の事」については「濫觴亦知ラス、熊野ノ飛瀧ト見ユ、東ニ當リテ瀑布アリ、其水靈也……」と、祭神のことが記されている。尚、普天満宮は熊野那智（飛瀧）に末吉宮を熊野新宮に、識名宮を熊野本宮に見立てて信仰されていたようである。さらに、近世沖繩における熊野三山いわゆる権現信仰は琉球八社の内の七社はもとより、その分社、あるいはビジュル・観音・靈石信仰とも習合しながら県内広域に伝播し、拝所としても数多くある。当宮の縁起伝承には首里桃園に女神が出現され、後に普天間の洞窟に籠られた。さらにその後、洞窟より仙人が現れ「我は熊野権現なり」と御神威弥高に示された。又、中城間切谷屋村の百姓夫婦や美里間切東恩納村の「当ノ屋（屋号）」に黄金（神徳）を授け苦難をすくつたという伝承があり、「当ノ屋」ではそのお礼参りが三百年余、現在まで続いている。旧暦九月は普天満参詣と言つて、かつては中山王はじめノロ、一般の人々が各地より参集し礼拝の誠を捧げた。

昭和二〇年、戦時中は当時の社掌が御神体を奉持して糸満へ避難した。戦後は、社掌の出身地である具志川市田場に仮宮を造りて祀り、その後、普天間の境内地が米軍より解放されると、昭和二四年二月、元の本殿に還座した。現在の社殿は、昭和二八年よりハワイの県人会を始め県内外からの浄財により随時復興した。昭和四七年五月一五日の本土復帰に伴い神社本庁包括となる。

御神徳

御神威は古今を通して高く、又沖縄県中部最大の聖地として参詣者も多い。当宮は、縁起に示されるように、航海安全、豊漁、五穀豊穰、の神様として、又身近には、交通安全、縁結び、安産、初宮参り、近年は建築関係諸祈願、商売繁盛、学業成就祈願など、結びの神様（諸願成就）として信仰されている。

祭典

元旦の歳旦祭から大晦日の除夜祭まで毎年新暦旧暦合わせて七十四回の恒例祭典が行われ、国家の安泰、世界平和、諸産業の繁栄、崇敬者を始め人々の福祉の増進、家内安全、健康、幸福の為に祈りが捧げられる。

◎主な恒例祭典

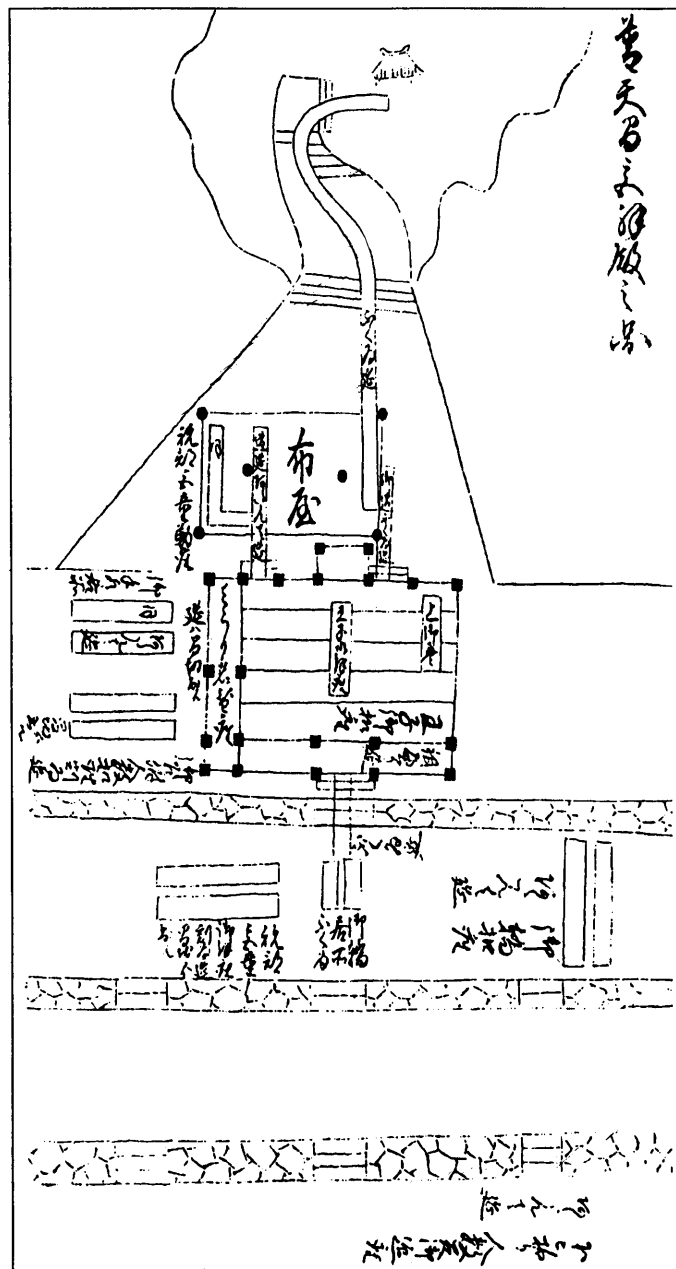
例大祭 旧暦 九月十五日

祭旦祭 一月一日
大 祓 六月三十日・十二月三十一日
七五三祭 十一月十五日

新嘗祭 十一月二十三日
除夜祭 十二月三十一日
重陽祭 旧暦 九月九日
月次祭 新暦旧暦毎月の一日、十五日

普天満参詣（フティマ・メー）

旧暦九月になると、昔は重箱詰の御馳走を持参し、普天満宮参詣の習慣があった。王様を始め三司官、親方、一般住民の参詣があり、九月中境内は賑いを見せた。王様の参詣を「フティマ・ウサンチー」一般住民の参詣を「フティマ・メー」あるいは「九月拝み」等と称した。記録によると「琉球国由来記」に、「普天満参詣 尚賢王御宇、順治元年甲申九月始也。還幸之時、龍福寺先王神主、御香、御花、御酒祭奠、行_ニ拝礼_一也」とあり、又一七九七年に発令された真和志之平等学校の規模帳によると「一_ニ中略_一年回（先祖祭）、船送迎、彼岸、清明、七夕、施餓鬼、普天間参り、其の日は一日暇の事」とあり、当時の学校でも、普天間参りは公に一日の休暇がもたらえた。首里から普天間への道は、王の参詣道として、さらに一七世紀後半に宜野湾に寓居していた尚貞王の世子尚純によつて普天満宮から浦添の沿道に松並木が植えられ、宜野湾並松、普天間街道などと呼ばれた。昭和七年国指定天然記念物であつたが、おしむかな戦災と戦後の松食い虫の被害を受け消失した。現在でも九月になると、門中・各村などからの参詣も多い。



右の「普天間宮拝殿の図」は中城王子が普天満宮参詣時の「図帳 道光十九年己亥（一八三九年）」のもので、いわゆる参拝位置の図示である。中央が拝殿でその上に「布屋」、さらにその右横の細い「ふくぬ筵」を通じて上の家形図が洞穴内の本殿で、現在の奥宮である。図の中に記入されている文字は「王子御控座」「王子御控座」「祝部・宮童勤座」「ふくい筵」「あだんば筵」「御轎居所ふくぬ」等々である。図帳には洞内（本殿）参拝図もある。」

普天満宮洞穴（市指定文化財「名勝」）

洞穴は、全長二八〇メートル、洞口が二ヶ所、大きな広場が三ヶ所あり、過去の水流の痕跡を示す洞穴ノッチも見られる。洞穴の形成規模等からして地域の地形地史を知るうえでも貴重なものである。洞窟内及び東洞口付近は遺跡となつており沖縄貝塚時代前期後半以後の遺物が多数発掘されている。又、約二万年前の鹿、イノシシの化石なども発見され、「普天満宮洞穴」は、平成三年八月一日付で、宜野湾市文化財「名勝」に指定される。

普天満女神の由来

昔、首里の桃原というところに、世にも美しいひとりの乙女が住んでおりました。優しく気品に満ちたその容姿が人々の評判となつて首里はもとより、島の津々浦々まで噂となりましたが、不思議なことに誰ひとりその乙女を見た人はいないのです。いつも家にこもりきりで機織りにせいをだし、外出もせず他人には決してその美しい顔を見せません。神秘的な噂に憧れて、村の若者達は乙女に熱い想いを寄せておりました。

ある夕方乙女は少し疲れてまどろむうち、夢とも現ともなく荒波にもまれた父と兄が、目の前で溺れそうになっている情景がありありと見えました。数日前、父と兄や船子たちを乗せた船は、大勢の人に見送られ出帆していったのです。乙女は驚いて父と兄を必死で助けようとしましたが、片手で兄を抱き、父の方へ手を伸ばした瞬間、部屋に入ってきた母にわが名を呼ばれてハッと我に返った乙女は、父を掴んでいた手を思わず放してしまいました。幾日か過ぎて、遭難の悲報とともに兄は奇跡的に生還しましたが、父はどうとう還りませんでした。

乙女の妹は既に嫁いでおりましたが、ある日夫が、「お前の姉様は大そう美人だと噂が高いが、誰にも顔を見せないそうだね。私は義理の弟だから他人ではない。一目でいいからぜひ会わせてくれないか。」と頼みました。しばらく考えた妹は、「姉はきつと会うのを断わるでしょう。でも方法がひとつあります。私が姉様の部屋にいつてあいさつをしますから、そのとき何気なく覗きなさい。決して中に入つてはいけませんよ。」と答えました。

乙女はいつものように機織りの支度をしていましたが、その美しい顔に何となく愁いが見えます。神様が夢で自分に難破を知らせて下さったのに、父や船子たちを救うことができなかった悲しさが、乙女の心の糸車に幾重にも巻きついて放れないのです。旅人や漁師の平安をひたすら神に祈り続ける毎日でした。

「姉様しばらくでございます！」

妹の声に振り向いた乙女は、障子の陰から妹の夫が覗いているのを見つけました。その途端に乙女は逃げるように家をとびだしました。末吉の森を抜け山を越え飛ぶように普天満の丘に向かう乙女に、風は舞い樹々はざわめき、乙女の踏んだ草はひら草（オオバコ）になってなびき伏しました。乙女は次第に清らかな神々しい姿に変わり、普天間の鍾乳洞に吸い込まれるように入つて行きました。

そしてもう再び乙女の姿を見た人はありません。現身の姿を消した乙女は、普天満宮の永遠の女神となったのです。

普天満宮仙人の由来

昔、中城間切安谷屋村に夫婦が住んでいました。貧乏ではあつたが夫婦が大変仲も良く、真面目に生活していました。ある年の事、作物が取れず年貢も納めることが出来ませんでした。そこで夫婦は相談して、妻は首里の殿内奉公に行くことになりました。ときどき髪を切つて髻として売り、供えの品を買つて、毎夜普天間へ行きお祈りすること三、四年、風のある日も雨の日も一日も欠かさず通いました。

九月のある夜、あいかわらず夜道を普天間へ行き、鳥居に近づくときひとり一人の老人に会いました。老人は、「大切な品を持つているが用を足して来る間、ちょっと預かつてはくれないか。」と話しかけてきました。再三言葉を尽くして断りましたが、老人はその品を押し付けて何処へか立ち去つてしまいました。やむを得ず、預けられた品を守っていましたが、老人はいくら待っても戻ってきません。ついに待ちきれなくなつて品物を持ったまま首里に帰りました。

その後も品物を返さねばと思い老人に会つた場所へやって来るが、どうしたものか一度も姿を見せません。妻は、その老人に、会わせてくれるようにと普天間に通つて祈り始めました。ある晩夢にその老人が現れて、「吾は熊野権現なり、汝等は善にしてその品を授けるものなり。」と、毎晩同じ夢を見るので不思議に思い、その包みを開けてみると、まばゆい程の黄金が入っていました。夫婦は喫驚し、神の恵みに深く感謝して御恩返しに石の厨子を造り石像三体（権現）を安置しました。

その家は富貴となり、この事は秘していましたが、いつしか知れ渡り、以来人々から広く信仰されるようになりました。